

地域コミュニティ紙の活動「シニアが動けば地域が変わる」：さまざまな場所に求められる

People-Centered Nursing Care

| | |
|-----|---|
| 著者 | 佐久間 保人 |
| 雑誌名 | 聖路加看護学会誌 |
| 巻 | 21 |
| 号 | 1-2 |
| ページ | 60-61 |
| 発行年 | 2017-07-31 |
| URL | http://doi.org/10.34414/00015285 |



地域コミュニティ紙の活動「シニアが動けば地域が変わる」

佐久間 保人

I. 団塊の世代が70歳に！

筆者自身が1948年生まれであり、団塊世代のど真ん中である。われわれの前後の世代は約800万人といわれ、善きにせよ悪きにせよ、団塊の世代が社会に与えてきた影響は大きいものがある。

小学校時代には校舎が不足し二部教育として時差通学、クラスは60人クラスで、すし詰め教室であった。筆者は高校卒業後、百貨店に入社したが、大学に進学したものは学園紛争に巻き込まれていった。

就職して結婚したわれわれは、家族をもち子ども達は第二次ベビーブーマーとよばれた。持家をし、車を手に入れ、消費も給料も拡大していった日本の高度成長を支えてきた世代ともいえる。

現在「2025年問題」が問題提起されているが、これは、そのわれわれの世代が75歳を迎え「後期高齢者」になる時期である。筆者自身は60歳定年であったが、高齢者の雇用延長などの施策で65歳までは会社に残った人も多かった。しかし、いま社会にとって団塊世代が社会のお荷物になっている現象も多くみられる。

II. 一般的なこの世代の一面

生涯現役社会の実現といわれているが、65歳以上の雇用はほとんどが軽作業に限られており、現役時代の経験やスキルが生かされていない。またやりがいも薄いことがある。

知的な活動に興味があり自治体の勉強会、地域文化案内などの活動に参加している人も多いが、現役時代には地域とかかわることが少なかった為、比較的時間ができた現在、地域に溶け込めないシニア男性が多い。地域の図書館や公園の昼間にはこんな世代が多く見受けられる。

まだ動ける時期になにか地域に貢献したい、自分の生きがいを発揮したい、しかしながら、そんな機会や集まりには積極的に参加できない。そんな感情があることから、地域資源として、余裕と時間がある世代が大変多くなっていると感じる。

III. 地域コミュニティ紙天空新聞の創刊

筆者は2007年に定年退職したが、在職中に得た経験やスキルを生かし、中小企業のコンサルタントとしてすごしてきた。ある縁から2013年、佃リバーシティ自治会広報誌として地域コミュニティ紙を創刊する機会を得た。地域活動にかかわれる喜びや自分を発揮できる場ももてたということであった。天空新聞は当初高層マンションを中心に5,000部からスタートし、自治会の会報紙の性格から変化して、現在は地域のコミュニティ紙として発行している。

2017年10月から発行部数を5万部に拡大し、マンションだけではなく地域全体に拡大している。しかしながら、以下3つを課題としながら4年目を迎えている。

- ①記事が作れるか：現在20人近くの読者記者やサポーターの協力を受けている。
- ②配布ができるか：宅配している天空新聞ではあるがセキュリティ面で投函できないマンションもある。
- ③発行経費がまかなえるのか：民間企業の援助を受けビジネスとしての取り組みや継続を行っている。

IV. 天空新聞が進める地域活動「R60中央プロジェクト」

自治会広報活動から地域コミュニティ紙として性格が変化していくなか、「R60中央プロジェクト」として地域活動を始めた。団塊世代の第二のリタイアが進み、シニアがもっているスキルや経験を地域社会に生かすことが必要である。そして団塊世代が中心となった地域活動を定着化させ、次代に引き継いで行くことが大切である。

そこで、次の5つのプロジェクトを立ち上げた。

- ①R60カフェ：地域との連携からシニアが気軽に立ち寄れる場をつくる。月島西仲通り「居酒屋鶴ちゃん」をデユースして開催している。地域商店街の活性化も視野に入れている。
- ②R60カルチャー：シニアの知見や趣味の技術を地域に発表する。R60カフェをベースにして、シニア自身が運営し、生きがいにつながるような場としていく。
- ③R60ビジネス：シニアが培ってきたビジネス人脈や

技能を地域企業や若い経営者に伝授する。できれば成功報酬で有償ボランティアとして行く。

- ④R60 The MUSICAL：インプロ（即興劇）を使い自分の表現力の強化から地域を題材にした創作ミュージカルを上演する。2016年5月に第1回を開催した。次回は2018年4月に開催予定である。
- ⑤R60タイムス：シニアの活動を紹介していく広報紙を天空新聞に折り込んで配布している。

V. R65月島カフェ：中央区「通いの場支援事業」への参画

2025年問題（団塊の世代が75歳を迎える）が問題提起されているが、中央区の老人福祉事業でも文化活動・高齢者福祉活動は団塊の世代をターゲットにしたものは少なく、結果的に75歳以上の女性が参加する活動が多くみられる。中央区は「通いの場支援事業」を2017年に立ち上げ、民間ベースの運営で若干の補助金を支給しながら開設した。天空新聞はその趣旨を生かすため「R65月島カフェ」を開設し、2017年11月現在12回、延べ100人程度の参加者を得ている。しかしながら参加者のうち、男性は1割に満たず、団塊世代の参加も2割程度である。理由として、以下が考えられる。

- ①区の要望として、介護予防につながるプログラム（体操や歌など）を複数取り入れることとなっているが、運営側にノウハウが少ない。
- ②生きがいづくりや、閉じこもり予防を目的にしているが、どうしても脳トレ・ゲームなどのメニューとなってしまう、魅力的なメニューがない。
- ③「営利目的ではないこと」は、ボランティアの限界がある。

VI. 「るかなび」活動への期待、活動領域の拡大・広報活動の強化

天空新聞では聖路加国際大学で運営する「聖路加健康

ナビスポット：るかなび」の活動を数回取り上げて紹介した。予防健康・健康図書・健康相談・健康講座・ミニコンサートなど実に魅力的な活動を実施している。

このノウハウを中央区に拡大すべく、「るかなび」を中央区9か所で実施されている「通いの場支援事業」に連携、参画できないかと考え、2017年11月2日14時から「月島にるかなびが出張してきました」を開催することとなった。当日は「るかなび」より2人の看護師、図書司書の派遣から「握力・血圧などの測定」「健康情報の取得」など健康をテーマにした幅広い話題と参加者を巻き込んだ交流を行った。まさに市民とともに行われた「さまざまな場所に求められる People-Centered Nursing Care」の実践であった。

VII. 人々が主体となり、専門家と協働しながらコミュニティにおける健康を増進していくこと

聖路加国際大学は看護を学ぶ学生と健康医療の専門家が集結している地域にとって自慢すべき、また誇るべき学究の場である。学生にとっても研究者にとっても地域の看護・医療・介護などの実態を学べる場である地域活動は貴重な場に違いない。

健康医療の専門家が地域活動や行政と連携を深めていく重要性を強く感じる。その為にも、聖路加国際大学が高齢者福祉事業の場や地域包括センターなど行政とのかわりを積極的に求めていくことや、聖路加国際大学が主体的に地域のボランティアや自治会、企業とのかわりを深めていくことは、社会的に非常に意義のある活動である。天空新聞はそうした聖路加国際大学の活動を積極的に地域に伝える広報活動を担いたい。